

# かたりべ127

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



鈴木信太郎記念館外観



写真上 書斎棟南側のステンドグラス



写真下 書斎内の書棚と信太郎が使用していた机

鈴木信太郎記念館が3月28日にオープンします！

二〇一〇（平成二二）年に豊島区が敷地と建物の寄贈を受けて以降、開設準備を進めてきた豊島区立鈴木信太郎記念館（フランス文学者鈴木信太郎の旧宅）が東池袋五丁目に開館いたします。

大谷石の擁壁上に位置する記念館は、書斎棟を中心とする展示エリア、茶の間・ホール棟を中心とする学習エリア、座敷棟を中心とする多目的エリアから構成されています。展示エリアでは、建物の増改築の変遷を物語る建築図面や書類等を展示（書斎棟北側廊下部分）。書斎棟書斎内では、フランス文学に関する信太郎の著作と蒐集資料を紹介しています。また、書斎南側の窓上部に浮かび上がる信太郎自らのデザインによるステンドグラスも見どころのひとつです。学習エリアでは、戦前期の鈴木家の建物配置状況を五〇分の一の縮尺で再現した模型を展示するほか、信太郎の著作やフランス文学、建築関連の参考文献が閲覧できます。多目的エリアでは、通常は、床の間・違い棚・付け書院を備える書院造りの間取りをそのまま展示して、和室体験の場とし、記念館主催のワークショップ等の開催時にはイベント会場としても活用します。

五月以降は、開館記念事業として講演会や見学会などのイベントも実施いたします（ホームページ・「広報としま」参照）。まずは一度ご来館いただき、当地が日本におけるフランス文学研究発祥の地であることを実感していただきたいと思います。（郷土 秋山）

## 鈴木信太郎記念館利用案内

所在地 豊島区東池袋5-52-3

電話番号 03-5950-1737

開館時間 午前9時～午後4時30分

入館料 無料

休館日 月曜日（祝日が重なる場合は翌日も）、第三日曜日、祝日、年末年始、展示替えによる臨時休館

最寄駅 東京メトロ丸ノ内線「新大塚駅」下車徒歩約3分

\*駐車場・駐輪場はありません  
公共交通機関をご利用下さい

# 「旧鈴木家住宅」の資料たち

## 第13回 信太郎のフランス遊学事情と三通の電報



一九一九（大正八）年に東京帝国大学文学部仏文科を卒業した信太郎は、一九二五年の春から自費でパリに渡ります。

信太郎はパリで生活するにあたり、あらかじめ三つの目標を立てていたようです。まず芝居を観ること、次に本を買うこと、そしてヴィヨン（一五世紀に活躍したフランスの詩人）を読むために中世フランス語の勉強をすることです。その合間に絵を鑑賞したりするのが彼の生活スタイルで、大学の講義を聴講したりすることはいつさえ計画されていませんでした。

信太郎が遺した日記や手紙によると、約一年間の遊学中に二六〇回の演劇を鑑賞し、毎日のように本屋めぐりを行い多くの書籍を購入することがわかります。その過程でパリの著名な古書店シャンプオン書店の店主エドゥアル・シャンプオンと親交を深め、そして彼の協力によりヴィヨン研究者として有名なりュシアン・フリーヤから個人授業を受けることになるなど、先に掲げた目標をひとつずつ達成していきました。

信太郎のフランス遊学は経済的な心配を一切する必要がなかったため、自由に

演劇を観て、自由に本を買い、上等なレストランで食事をするという恵まれたものでした。そして、フランス国内各地へ旅行にもでかけます。一九二六年三月にはリヨンに数日滞在して本を買い、その後南仏のマルセイユ、アルル、アヴィニオン、モンペリエなどをまわり、アヴィニオンではプロヴァンス文学の資料を大量に購入しています。

五月には、信太郎の幼なじみで同じ時期にフランスへ絵画の勉強に来ていた高島達四郎たけしやうらとスペイン旅行に出かけます。マドリッドで美術館をめぐり、闘牛を見物し、コルドバ、セビリア、グラナダなど二週間以上の典型的な観光旅行を行ってパリに戻ってきたのが五月二四日のことでした。

そんな信太郎を待っていたのが父政次郎の危篤を知らせる日本からの電報でした（下写真参照 上から五月六日付、五月二二日付、五月二七日付、鈴木信太郎記念館蔵）。

《五月六日付》「マサジロウ ヤマイオモシ リユウガクヲキリアゲ スグカエレ リヨヒ ニセンゴヒヤクエン パリ ニ

チフツギンコウエ オクツタ ヘンマツ ナカモト タツノ」

《五月二二日付》「サキノデンポウミタカ ヤマイオモイ スグカエレ ヘンマツ ナカモト タツノ」

《五月二七日付》「チチモカエリマツ マニアワネドモ ナルベクハヤクカイレ コンゴノソウダンアリ ヘンマツ タツノ」

電報の差出人の「ナカモト」とは義理の父親にあたる仲本昇太郎、「タツノ」とは東大教授の辰野隆たけのゆたかを指します。差出人の立場で考えると、五月六日付で電報を打電したのち、「ヘンマツ（信太郎からの返事を待つという意）」としたにもかかわらず信太郎からの反応がないため、不審に思い二二日付で再度打電したものとされます。

父の危篤を知らせる電報により、信太郎はフランス



遊学を中断し、シベリア鉄道経由で帰国することになります。その後、父政次郎は六月八日に死去、信太郎の日本到着は六月一八日ですので、残念ながら父親の最期に立ち会うことはできませんでした。それにしても経済的に恵まれた信太郎の遊学事情は、先の電文からもうかがえます。それは五月六日付の電報にある帰国分の旅費として二五〇〇円を送金したという部分です。帰国後、信太郎は東京大学から一年間に六〇〇円の給与を支給されたことが判明していますので、この時に送金された金額の多さには驚かされます。（郷土 秋山）

※本欄は、鈴木道彦著『フランス文学者の誕生』（筑摩書房、二〇一四年）一六五～一九二頁の記述を参照しました。

## 小学校展示見学

### 「郷土資料館で学ぼう 昔の暮らし・昔の道具」 実施報告

例年、郷土資料館では、小学校三年生が社会科学習「くらしのうつりかわり」の単元を学ぶ一二月から翌年二月頃に合わせ、昔の暮らしや道具に関する展示を開催し、小学校の団体見学を受け付けてきました。郷土学習の一環として、地域の資料館を見学することで、郷土の歴史や暮らしの移り変わりに関心を持ち、現在の暮らしと比べながら、学習してもらうためです。

今年度も、昨年一〇月一日のリニューアルオープン記念として開催した企画展「学びと暮らし」(かたりペー一二十六号参照)の展示見学を中心とした、小学校の団体



常設展示室にて、豊島区の歴史や区内の遺跡で出土した土器について解説しています。

見学を実施しました。一月の限られた期間での受付となりましたが、多くの区内小学校からお申込みいただき、計一二校が来館しました(仰高小学校、豊成小学校、清和小学校、さくら小学校、長崎小学校、千早小学校、池袋本町小学校、池袋第一小学校、朋有小学校、高南小学校、目白小学校、池袋第三小学校、以上計七八六名)。

担任の先生方には、下見のため郷土資料館へ来館していただき、学芸員と打ち合わせをしながら、各学校の児童数や学習進度に合わせて、見学内容を決めていきました。実際の見学では、昭和三〇年代



レファレンスルームを模様替えして、実際の資料を見せながら道具の変遷について説明しています。

の茶の間の再現展示や、火のし、炭火アイロン、電気アイロンといった道具の変遷まの展示の他にも、豊島区の歴史や郷土資料館の役割などを学芸員が解説し、様々なことを熱心に学習する児童の様子が見られました。なかには、「もっとじっくり見たい!」ということで、学校のない休日に再訪する児童もいました。見学後に行なった先生方へのアンケート回答の一部をご紹介します。

◇リニューアルされて、展示も見やすく、子どもたちはとても喜んでいました。

◇三年生のメインとなる昔の道具、移り変わりを詳しく説明していただき、ありがたかったです。(児童が)戦争について、こんなにも興味を持つものだなと、



企画展示室にて、昔の暮らしや道具について説明しています。「ちゃぶ台は、こんなふうになんていってしまうことができます」

おどろきました。  
◇実際に道具を見たり、ふれたりする機会があり、よかった。学芸員の方々が親切丁寧に説明してくれて、とてもよかったです。

本などでは見たことのない昔の道具を間近に見ることができたこと、また学芸員の専門的な解説があったことについて、ご好評をいただきました。一方で、茶の間の再現展示スペースが狭く、児童全員を畳へあげて見学させることができず残念だった、とお声もいただきました。限られた展示空間のなかで、暮らしの再現展示をするためのさらなる工夫が今後の課題となりました。

リニューアルオープン以降、初めての学校連携事業となりましたが、今後も郷土資料館と区内小学校が連携することで、より地域に関心を持って学習できるように展示を開催していきたいと思えます。

謝辞 このたびはたくさん的小学校にご来館いただき、また先生方には多大なご協力を賜りましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

(郷土 岩崎)

# 連載「絵はがきは語る」(10) 「大東京」の成立と豊島区の誕生

明治二二（一八八九）年東京市一五区の成立以降、人口増加と都市化の進展により、大正中期中から東京地域の拡張、隣接町村の合併が問題となりました。

大正二二（一九三三）年の関東大震災を契機に、隣接五郡（荏原郡・豊多摩郡・北豊島郡・南足立郡・南葛飾郡）の人口が急増し、復興事業が一段落する昭和五（一九三〇）年には、東京市の人口約二〇七万人、五郡の人口約二九〇万人に達し、行政区域を越えた都市活動が営まれる一方で、上下水道、病院などの都市的施設の整備では不均衡が生じ、市と隣接町村の一体的都市経営が切実な課題となっていました。

そこで東京市は、昭和六年八月に臨時市域拡張部を設置し、隣接一八町から八四町村まで四つの合併案を提示します。これに対し、町村側は隣接五郡八二町村の合併を要望しました。それを受けて東京府知事は内務大臣に申請し、昭和七年五月二四日、五郡八二町村の合併と東京市への編入が決定します。

合併する町村にとって、新しい区の編成と名称をどうするか、区役所をどこに設けるかは極めて重大な問題でした。

豊島区域の場合、東京市案では西巢

鴨・高田・長崎の三町で池袋区とし、巢鴨・滝野川の二町で滝野川区としていました。その理由として、「高田町と西巢鴨町は東京市の小石川区に接し、市と近郊住宅地との連絡地帯として、都市計画道路の既成線を始め山手線、王子電鉄など交通の利便は非常によい。同時に三町間に乗合自動車が開通して三角関係の交通からくる民情、町風の実質からしても一区を形成する合理性がよい。」

一方、「巢鴨町は東京市の小石川区と本郷区とに隣接し、住宅地として特別に発達して人口密度も市内山の手各区と大差はない。また、滝野川町は（略）巢鴨町の東北部をとりかこむように発展してきている。交通上からすると、二町とも最も恵まれ（略）両町の完全な融合に寄与するところが非常に大きい。ただ、巢鴨町と西巢鴨町を分離しそれぞれ異なる区に編成したのは、池袋区、三河島区および王子区の編成上やむをえないことであって、西巢鴨町を同一の区に属させなければならぬ理由は少なく、むしろ、交通その他の関係からは滝野川町と組み合わせることの方が巢鴨町にとっては自然である」と、交通の利便性を優先した案でした。

これに対して長崎・高田の両町と西巢

鴨町民有志は、三町で一区を編成する東京市案を支持しますが、区名に関しては長崎・高田両町は目白区、西巢鴨町民は池袋区を支持し、区役所については長崎町と西巢鴨町民は池袋駅付近を、高田町は高田町役場を主張しました。一方、西巢鴨町長は西巢鴨・巢鴨・高田・長崎の四町で豊島区とし、区役所を池袋駅付近に置くことを請願しました。

しかし府知事は、三町を目白区とする等の変更案を諮問し、これに対し巢鴨町では巢鴨・西巢鴨両町の不分割を要望し、滝野川町は一町で一区の編成を主張する

など、様々な陳情が出されました。

最終的には、警察・郵便・氏子組織などの管轄地域を尊重し、巢鴨・西巢鴨・高田・長崎の四町で豊島区とすることで決定しましたが、豊島区は最も採め、変更が多かった区の一つでした。区名の豊島は北豊島郡の名を残すために採用され、区役所は、区の中で、池袋駅近くの荒玉水道組合役場が使われました。

こうして昭和七年一月一日、豊島区を含む東京市三五区の「大東京」が成立し、ニューヨークに次ぐ世界第二位の大都市が誕生しました。これを記念して、新二〇区の宣伝をかねた名所案内の絵はがきが多数発行されましたが、なかには「巢鴨区」と記されたものもあり、当時の混乱ぶりが窺えます。（郷土 横山）

【参考】『東京百年史』第五巻、一九七九年／『豊島区史』通史編二、一九八三年



大東京完成記念（乙）記念スタンプ用絵はがき（東京市発行）「新大東京区分図」 下谷郵便局の記念印が押されている。上下とも大木殖夫氏寄贈



「新大東京編入二十区」  
9番が豊島区

# ミュージアムのお仕事……展示設営編



図1 空っぽの企画展示室



図2 壁の増設



図3 壁紙の貼付



図4 作品を予定位置に配置



図5 作品の壁かけ



図6 作品の設置



図7 水平を確認



図8 ワイヤーフックの固定



図9 照度の確認

二月六日から三月二五日まで、豊島区が所蔵する美術作品を展観する展示として美術分野による企画展「アトリエのときへ 10の小宇宙」展を開催しました。展示公開に向けてのべ五日間かけての設営となりました。美術の展示作業には国内の学芸員で共有される決まった工程があります。今回は普段は見ることのできない裏側、美術展の展示設営作業をご案内しましょう。

展示ケースを残して空っぽになった企画展示室（図1）。ここに絵画をかけるための壁を増設します（図2）。学芸員が作った配置の設計を元に、会場設営の造作は美術展設営専門の業者にお問い合わせしています。（図3）では建てられた壁に壁紙を貼っています。その壁にかける作品が際立つように、または展示のテーマに合わせて壁紙の色をあらかじめ決めて

います。壁の制作が終わると、次はいよいよ展示作品の登場です。まず室内の壁面に沿って、予定の位置に作品を並べます（図4）。いきなり固定しないのは、壁にかけたり（図5）台座や展示ケースに置いて（図6）、見やすい位置か、作品と作品の間はバランスのとれた配置かどうか確認するためです。例えば絵画は身長一五七センチメートルの人が前に立

つ時、中心に視線が来るように、作品を壁かけするのが基準となっています。固定の際には、世界にひとつしかない作品を傷めぬように、テグスやフェルトなどを使い、地震などによる転倒や落下での作品の破損を防ぐために丁寧固定していきます。作品が水平になっているか、水平器でチェック（図7）。これで位置が確定します。今回は絵の展示に天井から下がるワイヤーフックを使用しているの

で、絵が揺れないようワイヤーを壁面にタッカーで固定しています（図8）。最後に、室内の照明の照度を設定します。室内全体の明るさ、作品ごとに当たるスポットライトの向きを決め、照度計で明るさを確認します（図9）。作品が光によって劣化しない程度の明るさに合わせなければなりません。

以上のように、美術作品の展示の場合、鑑賞者にとって見やすく、また作品にとって負担にならない（室内を作品に最良の温湿度に整えるなども）、この二つの条件を両立させるように注意を払い展示を組立っています。事前の調査研究、作品の選定や図録執筆、会場構成案などは学芸員が主に担う部分ですが、展示の完成には、学芸員のイメージを形にしてくださる設営業者の協力も多大です。（美術 堀口）

## 豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動を続けています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、漫画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりをご紹介します。

### 時代小説家 野村 胡堂

(一八八二—一九六三)



野村胡堂・あらえびす記念館提供

### 【胡堂の生い立ち】

一九三二（昭和六）年から二六年間にわたり、全三八三編の物語が紡がれた「銭形平次捕物控」。度々映像化されたこともあり、大衆から絶大な支持を得ました。その作者である野村胡堂は、岩手県紫波郡大巻村（現・紫波町大巻）にて生を受けました。自宅の蔵にあった多数の書物を読んで育ち、岩手県尋常中学在学時に

は、後輩の石川啄木らと回覧雑誌を作ったり、「葦舟」の名で俳句を詠み『ホトトギス』などに投句していました。

胡堂の執筆活動への情熱は、一九二二（明治四五）年に報知社（後の報知新聞社）入社後は記者の仕事に注がれます。

### 【豊島区での生活】

胡堂は一九一八（大正七）年から一九二八（昭和三）年まで、高田町大字雑司ヶ谷字亀原（現・雑司が谷二丁目）に居を構えていました。ちょうど三〇代半ばから四〇代半ばの働き盛りの頃で、『報知新聞』に「時事川柳」欄を設けたり、大正

天皇崩御の際に二面記事を担当したりと新聞社での仕事を充実させていました。その一方で、処女小説「二萬年前」（一九二二年）を新聞連載したり、胡堂のもう一つの顔であるレコード音楽評論家「あらえびす」としての活動をスタートさせたりといった、その後の活動につながる重要な時期を豊島区で過ごしました。

### 【捕物作家クラブの結成】

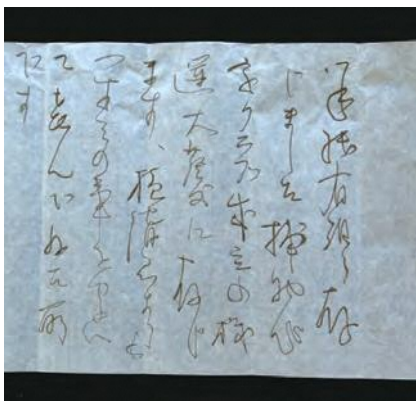
一九四九（昭和二四）年、捕物小説の親睦団体「捕物作家クラブ」が発足します。会長は野村胡堂が務め、当初は七六名が参加しています。「捕物まつり」の開催や『名作捕物小説集』（岩谷書店）の刊行など、捕物小説の発展に寄与し、会

員同士の親睦を深める活動を行いました。

そんな捕物作家クラブ結成の背景には、当時「探偵作家クラブ」の会長だった江戸川乱歩の存在があります。

乱歩は、一九三四（昭和九）年から三年間池袋に居住しており、戦後、乱歩邸に集まる仲間たちと、一九四七（昭和二二）年に探偵作家クラブを結成しています。その際、捕物作家が加入できなかったことを気にしていた乱歩は、横溝正史や城昌幸に捕物作家クラブを作ることを勧めていました。

捕物作家クラブ結成が決まった折には乱歩は「御手紙有難う存じました 捕物作家クラブ成立の機運大慶に存じます、横溝君よりも一寸その事を聞いて喜んでゐた所です」（一九四九・三・二二日付）と記した書簡を胡堂に送り、その喜びを伝えています。（文学・マンガ 安達）



乱歩から胡堂に宛てられた書簡(部分) 1949.3.22付  
野村胡堂・あらえびす記念館提供

## 編集後記

『かたりべ』一二七号をお届けいたします。本年度も最終号となりました。

本号は鈴木信太郎記念館の開館、小学校の団体見学、美術分野の企画展と紙面の半分が事業報告の記事となりました。連載の続きを期待されていた方には申し訳ありません。しかし、それだけ多くの事業が展開することが出来、皆様との接点が多様に設けられたということだと思います。

鈴木信太郎記念館の開館をもって、郷土資料館、雑司が谷旧宣教師館と併せて三館での運営体制となります。次年度には記念館開館記念事業として講演会などを企画しておりますので、今後も記念館、資料館、旧宣教師館それぞれの活動にご期待いただければ幸いです。

\*郷土資料館は、3月26日（月）から4月12日（木）まで展示替えのため臨時休館いたします。4月13日（金）からは郷土による収蔵資料展を予定しておりますので、今しばらくの間お待ちください。

（編集 上田）

かたりべ  
No.127

2018年3月23日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>



TOSHIMA  
International City  
of Arts & Culture